

高山と深海の発動

170 国立彰化高級中学

窓外の景色が最も濃厚で漆黒の核心へと移り変わる時、私は悟る。
自らが思いを寄せる無陵の桃源郷に、まもなく巡り会えるのだと。

ガタゴト、ガタゴト——！

暗闇のトンネルを抜け出たその瞬間、一筋の白光に導かれ、あの懐かしいホームが目に見え込んでくる。カメラを構えた観光客で賑わう現在の駅ではなく、私だけの輝かしい時代を纏った、あの姿だ。

多良の山並み、潮の満ち引き、そして南迴公路を行き交う車流には、最も原始的な生命の鼓動が宿っている。遠くの白雲は大空の広がりを描き出し、陽光を浴びた線路は金属の光沢を放ちながら見事な平行を描いて伸びていく。光の粒子が煌めく太平洋、そして雄大に連なる中央山脈と肩を並べるようにして。

鋼鉄の身体で山と海が出会う世界を駆け抜けるこの一瞬こそ、私が最も待ち望んでいた時間だ。山海の浩瀚（こうかん）に身を委ね、自由な空気を享受する。あの鮮やかな赤い手すりは、まるで蒼天の海岸線に刻み込まれた歳の刻印のようだ。

潮風が頬をかすめ過ぐ中、私は絶え間なく脈打つ生命の鼓動に耳を澄ませる。この壮麗な景色がくれた誓いを胸に、私は前へ進み続ける。たとえ風雨が巡り、四季が移ろおうとも、果てしなき時の流れの中で、私たちは必ずまた巡り会えると信じているから。